

ミドル企業

きらり

山科精器

造船向け注油機、シェア首位

「よそがやらないものを作り出す」をモットーに技術尊重経営を貫いてきた山科精器(滋賀県栗東市)。自動車や船舶向けの工作機械や船舶向けの注油機、熱交換器を製造する。最近では医療機器の製造にも乗り出し、バイオニア精神でオンリーワン商品を創造している。

売りは「顧客の仕様に合わせた特殊な加工に特化した専用機の製造・開発」。そう語るのは2016年に4代目として就任した大日(おおひ)陽一郎社長(42)だ。なかでもニッチながら、造船向けの注油機では業界トップシェアを誇る。

ここにきて注力するのが「環境と省エネ」(大日社長)だ。注油機では油のさす量を3分の1に削減した省エネ対応の商品を開発。船舶だけでなく、工作機械の潤滑油注入などに応用している。熱交換器関連では、船舶が沿岸に近づく際、環境に配慮してC重油からA重油に切り替える手間があった。これまでは手動で切り替えていたが、これを自動化したことで省力化にもつながり、注目されている。

環境・省エネ オンリーワンに



医療機器は本社工場のクリーンルームで製造している(滋賀県栗東市、写真上)。自社技術を生かして開発した鋼板の面取りができる省力機器。量産型の汎用商品だ(同下)



創業以来、専用機分野で実績を残してきたが14年、汎用機の分野に打って出た。「企業などの要望を待つのではなく、新機材をつかむこと」も必要(同)と判断した。鋼板の角の部分にエッジ処理を効率化した「卓上R面取り機」だ。それまで造船現場では鋼板のエッジ処理は手作業。作業負荷も大きく、熟練の技術が必要だった。それを誰でも簡単にできるようにした。造船業界などでの作業効率の大幅改善につながり「思った以上のヒット商品となった」(同)。

そこで大学との様々なプロジェクトに参画。プロジェククトに参画。やがて医師のニーズに合った製品開発に取り組み始めた。13年には第1弾となる血液や体液を吸い込む「吸引嘴(しゅんくわん)」を大阪大学と共同開発した。最近では開腹手術などを他の分野で生かせる「吸引凝固

医療分野でもヒット生む

「現在のは年1万個出荷している。近い将来、3万個までいく」(大日社長)と自信を深める。顎関節症のリハビリ用に東京医科歯科大学が開発した「開口訓練器」は日本だけでなく、東南アジアの医療機関からも注目されている。大日社長は「医療分野の17年度売上高は5300万円を超える見通し。18年度は1億円が見えてきた。20年度には黒字化したい」と意気込む。

工作機械、注油、熱交換器に続く4本目の柱として医療のメドがたつたのを機に、創業以来続けてきた事業部制を17年1月に廃止。営業、設計、製造の各部に再編し、横の連携をしやすい体制に変更した。これまで培ってきた技術を統合し、ファクトリーオートメーション(FA)などの新たな分野で、さらなるチャレンジを進める考えだ。(大津支局長 橋立敬生)

《山科精器の会社概要》

滋賀県栗東市
工作機械、熱交換器、医療機器の製造
1939年
135人
27億円
(2017年3月期)